

実は私はいま、嬉しい気持ちでこの文章をしたためている。この件については書こうか書くまいか、ずいぶん迷った。書けば間違いなく自慢になる。私は自慢だけは避けようと努力している人間である。歳をとると自慢が出やすい。しかし嬉しさが気持ちの中で大きく膨張してしまったので、もう仕舞っておけない。

ヴィーナスの原さんがNYでバーバラ・キャロルのライブを観ていた。すると一人の老人が近づいてきた。いろいろジャズの話をかわすうち、なんと私の名前が出てきたというのである。

老人はオジー・カデナである。ご存じだろうか。1940年代から主としてサボイ・レコードなどでスーパーヴァイズを行ってきた一種のプロデューサーの人。私はカデナと何年か前にロサンゼルスで会った。ファームサ・ビーチにあるライブハウス「ライトハウス」へ行ったらカデナがビッグ・バンドを指揮していた。バンドの前で踊っているので変な人だなと思ったら、それが有名なカデナだった。びっくりして敬意を表したわけである。

そんなことで私を憶えてくれたのだろう。そうそうカーティス・フラーの『ブルース・エット』が彼の制作だった。やつはビー・バップのピアノ・トリオが好きだと言っていたから、やつにライナー・ノートを書かせたら。彼はそんなふうに原さんに告げたのだという。

自慢はこれで終わり。

つまり二人のプロデューサーがバーバラ・キャロルのライブを観ていたわけである。どんな目で観ていたのだろうか。ライブ会場におけるプロデューサーの目にはいろいろな思いがある。原さんはバーバラ・キャロルを一発で気に入ってこのCDを作った。

彼女は現在78歳である。写真で見ると78歳の美を最高に表現している方である。音楽はどうか。78歳における音楽美というものを最大限に表出しているのがわかる。78歳はこう弾けばいいんだ。もちろん、歳はいっさい感じさせない。衰えなどというものは垣間見せない。まあその点、ピアノという楽器はわり合い楽である。管楽器はなかなか大変だ。

歳がいったからの音楽。いちばん大事なものはなんだろう。簡単に言ってしまうえば円熟だ。円熟のバーバラ・キャロルと一言いえば済む。しかし私はそれでは物足りない。以上、終わりなどという勿体ないことはできない。

バーバラ・キャロルのピアノ。妙な言い方だが「作り物」ではない。ジャズのミュージシャンは大なり小なり自分の音楽を作るものである。そしてその作りを楽器にのせているわけだ。若い時はやっぱり生硬だったりするケースが多い。それはそれで微笑ましかったりしていいが歳をとったら「自然体」がいちばん好ましい。バーバラ・キャロルのピアノ演奏はとにかく自然体だ。　そのことにいちばん感銘を受けた。

若い頃はクラシカルな要素が演奏にまざっていた。それを売り物にしていたニュアンスもあるのだろう。RCAレーベルにたくさんのバーバラ・キャロル・トリオがある。それはそれは美人さんのジャケットで、才色兼備の女性ピアニストとしてRCAのドル箱だったのだろう。私もLPレコードで何枚も持っている。何しろ美人ジャケットに弱いもので。

その頃のピアノ演奏はやはりクラシックのタッチが気になった。昔

- | |
|--|
| Sentimental Mood
センチメンタル・ムード |
| Barbara Carroll Trio
バーバラ・キャロル・トリオ |
| 1. レディ・ビー・グッド
Lady Be Good 〈G. Gershwin〉(4:31) |
| 2. オータム・イン・ニューヨーク
Autumn In New York 〈V. Duke〉(5:12) |
| 3. ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ
You'd Be So Nice To Come Home To 〈C. Porter〉(6:15) |
| 4. ヒアズ・ザット・レイニー・デイ
Here's That Rainy Day 〈J. Van Heusen〉(4:59) |
| 5. フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン
Fly Me To The Moon 〈B. Howard〉(5:29)* |
| 6. ラスト・ナイト・ホエン・ウィ・ワール・ヤング
Last Night When We Were Young 〈H. Arlen〉(6:45) |
| 7. オン・ア・クリア・デイ
On A Clear Day 〈B. Lane〉(7:21) |
| 8. マイ・ファニー・バレンタイン
My Funny Valentine 〈R. Rodgers〉(6:55) |
| 9. イン・ア・センチメンタル・ムード
In A Sentimental Mood 〈D. Ellington〉(5:21) |
| 10. イエスタデイズ
Yesterdays 〈J. Kern〉(6:33) |
| 11. アイ・ゲス・アイル・ハフ・トゥ・チェンジ・マイ・プランズ
I Guess I'll Have To Change My Plans 〈H. Dietz・A. Schwartz〉(5:23) |
| 12. アズ・ロング・アズ・アイ・リブ
As Long As I Live 〈H. Arlen〉(6:29)* |

バーバラ・キャロル Barbara Carroll (piano / vocals *)
ジェイ・レオンハート Jay Leonhart (bass)
ジョー・コクーズ Joe Cocuzzo (drums)

録音：2005年9月23、24日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

＊
Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at The Studio in New York on September 23 & 24 , 2005.
Engineered by Katherine Miller.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Front Cover：Robert W. Richards. Designed by Taz.

のアメリカ人はクラシカルが好きだったのだろう。なにしろ歴史的にクラシックというものを持っていない人種だから。それで主として白人層の人たちに好まれた。特に「ジャズ」という意識で彼女を聴いたわけではない。音楽として裕福な層のアメリカ人が愛聴したのがバーバラ・キャロルだった。キャピトルのジャッキー・グリーンズとかポール・ウエストンのストリング・オーケストラの次に彼女のトリオにニコニコと耳を澄ませたに違いない。良き時代である。

バーバラ・キャロルはそうした黄金時代に自分の黄金時代を築いたのだ。しかし歳をとってからはジャズが自然に彼女に同化した。

このCDの演奏からは自然のままのゆったりとしたジャズのグループ感が聴き取れる。グループ感というどうしても力こぶのニュアンスが入ってしまうものだが、彼女のグループは実にスポンテニアスなもの。それが聴く人を自然は最高という気分にするのだ。

ソロのフレーズに力が入っていない。自然にフツとフレーズが湧き出て、それがそのまま腕を運って指先に伝わる。その伝導系統の自然さ。ぎくしゃく感が皆無。それでいて空フレーズはない。何十年もピアノを弾き、さまざまな種類のフレーズが出ては消え、現れては消失する中で残ったエッセンスが、あたかも彼女が作曲した曲の断片のように聴こえてくる。

かと思うと「イエスタデイズ」で聴かれるように作曲者に敬意を払ったかのようなフレーズ作りも出てくる。フェイクと呼ばれる奏法である。アドリブより一段下に見られているが、そんなことはない。自分の節を出すのも、曲調に近い節で弾くのも、ともに聴く人にどう喜びを与えるかが問題なのだ。

バーバラ・キャロルのフェイクは最高。

「ニューヨーク・タイムズ」の音楽欄やその他の媒体に彼女の記事がたくさん出ている。媒体というのはいずれこの国も同じで、勿体ぶった書き方をして少しも面白くはないが、それらによると彼女は現在ニューヨークの「パードランド」やアルゴンキン・ホテルの「オーク・ルーム」というところに定期出演しているようだ。そのことが「大したこと」として報道されているわけである。

ベースのジェイ・レンハートとデュエットの場合もあるし、ドラムのジョー・コクーズを加えてトリオ仕立ての時もある。つまりこのCDは日常の彼女らのライブにおける仕事をそのままCD化したものなのだ。隠居生活をしている人を引っ張り出し、お尻を叩いて出来たものではない。ニューヨークの彼女のホヤホヤの現況が伝えられているCDだ。

それからこのCD、ライブ会場をそのまま自分の部屋に持ち込んだように音がいい。私はヴィーナスの音はジャズ音の中でいちばんの音と思っているが、最近のヴィーナス録音の中でベストに挙げたいのがこのCDだ。

なんといいても音が生々しい。いい音にはいるんないい音がある。ガツーンと強打する音もジャズ的にはいい音である。基本中の基本の音だ。しかしもう少し高級ないい音となると強打とともに生々しさが、必要となってくる。生々しさとは、つまり、雰囲気。ライブ会場にいるような錯覚を起こす音。生々しいとは「そこにいる」みたいな音のことを言うのである。

これがなかなか録音ではむずかしい。しかし、してやったり、というのが今回のこの盤である。目を閉じると目の前にバーバラ・キャロルが、ジェイ・レンハートが、ドラマーがいる。

特にジェイ・レンハートのベースが生々しいのだ。特に一曲目の出だし。動きが見える。ベースを動かす。それがベースの再生法の最もむずかしい技術なのだが、期せずしてこのCDはその動きが入っているようだ。不思議なことにベースが動くと他の楽器も運動し始めるのである。つまり音の低いところが動かないと高い音も言うことを聞かない。その逆はない。目立たない人だが、ジェイ・レンハートは凄いベーシストだと思う。

むずかしい音のするベースを、こんなふうに波がうず巻くようにCDに入れた録音技術者をほめなければいけない。近頃急に名前が出てきたキャサリーン・ミラー。女性である。女性で録音などという技術的なことが可能なのか、というのがわれわれ男性の考えることだ。大丈夫かよ、と。しかしこれだけやられるとまいりましたと静かに謝るしかない。

それよりもさらにほめなければいけないのがマスタリング技術者である。今日の私はほめてばかりいるが、いいことをほめてどうして悪いのだ。大したことのないものをほめるのが悪いのであって、いいことはどんどんほめてゆきたい。

最後にバーバラ・キャロルの2曲の歌である。年季の入った歌い、である。ボーカルという一般的な言い方では間に合わない。「歌い」というのがこの場合適切だ。歌いであるからボーカルより気持ちの入ったものである。味わうものである。2曲がちょうどいい塩梅の曲数であった。1曲聴いてじっくり味わい、またトリオ演奏に戻る。その変化の塩梅具合がいい。

寺島靖国